特別講演

ベルリン大学医学部と日本

Berliner Medizinische Fakultät und Japan

ゲオルク・ハーリヒ

ハーリヒ教授は、一九三五年生まれ、フンボルト大学医学領域医史学研究所の所長である。演題は「ベルリン大学医学部と日本」であるが、講演原稿が届いていないので、とりあえず「ベルリン大学医学部」について紹介しておく。

（鹿子木敏範）

ベルリン大学医学部は一般にシャリテ（Charité）と略称される。フランス語の原意は「慈善」だが、現代のフランス語では、この語を医療と結びつけて用いることはない。おそらく英米でもそうだと思う。ところが、一九六〇年に刊行された『シャリテ二五〇年』という記念出版では、シャリテ本来の敷地の外の研究施設（たとえば「医史学研究所」や「医学微生物学および疫学研究所」）もすべてシャリテに包括されている。つまりシャリテは「ベルリン大学医学部」全体を指す固有名詞であり、現在もなお「ベルリン市フンボルト大学医学領域」の別称である。

シャリテの創立は一七一〇年で、ベルリン大学の創立はその百年後（一八一〇）である。創立以来の聴講者名簿は、ウンター・デン・リンデン街の大学文書館（Universitätsarchiv）に保管されている。戦後日本人で観覧を許されたのは私だ

けである。日本人留学生については、一八七〇（明治三）年後期（一八七一年四月まで）にはじめてS・アオキ（青木周蔵・法科）とともに、S・S・SATOO（佐藤進）、S・HAGIWARA（萩原三圭）という二人の医学生の名が出てくる。彼らが聴講した七二年前期の医学部教授陣を調べてみると、

正教授

ユングケン、エーレンベルク、フォン・ランゲンベック、ライヒェルト、ロンベルク、マルチン、バルデレーベン、フィルヒョフ、フレーリヒス、デュ・ボア・レモン、ヒルシュ、トウラベ（助教授、私講師名略）

○臨床施設

A　独立の臨床研究所　a　外科・眼科臨床研究所　所長　フォン・ランゲンベック　b（略）　c　産科臨床研究所　所長　マルチン

B　シャリテ病院と関連する臨床研究所（カッコ内は筆者が調べた任期）

第一内科　フレーリヒス（任期一八七三～八五）（注）後任はフォン・ライデン（一八八五～一九〇八）

第二内科　トラウベ（一八五七～七六）（注）後任はフォン・ライデン（一八七六～八五）

外科　バルデレーベン（一八六八～九五）

眼科　シュワイガー（一八七一～一九〇〇）

婦人科　マルチン（一八五八～七五）（注）後任はシュレーダー（一八七五～八七）

梅毒・皮膚病科　レヴィン（一八六三～九六）

小児病科　エーベルト（助教授、一八四九～七二）（注）後任はヘノッホ（一八七二年から助教授、正教授一八八六～九三）

精神科　ウェストファル（一八六八～九〇）
○解剖学研究所　所長　ライヒェルト（一八五八～八三）　第一助手　デーニッ　（明治六年来日）
○病理学研究所　所長　フィルヒョフ（一八五六～一九〇二）
○生理学研究所　所長　デュ・ボア・レモン（一八五八～九六）
○外科・産科診療所　所長　フォン・ランゲンベック

耳鼻科は、耳科医のルーツェーが正式に大学の耳科主任となったのは一八八一年である。彼はベルリン市内の実地医から六三年に教授資格を得た。市立病院の耳科を委託されたのは一八七四年、一八七二年の名簿には助教授として名があるが、八一年まで独立の診療科に含まれていない。

第一内科（Die 1. Medizinische Klinik）と第二内科の成立の事情もややこしい。一七八五年にアルテ・シャリテ（一七八五～一八〇二に建ったシャリテ旧館）が拡張されたとき、内科は一科だけだった。一八一〇年にベルリン大学が創設され、シャリテが大学の教育を担当するようになると、旧館では不十分なので一八三一年から三五年までノイエ・シャリテ（新館）の新築が行われた。当時シャリテにはフレーリヒスの主宰するラテン語クリニックと、トラウベの主宰するドイツ語クリニックとがあった。トラウベの死（一八七六）後、フォン・ライデンがドイツ・クリニックを継いだが、フレーリヒスの死（一八八五）後、ラテン・クリニックへ移って主任となった。この交代以来、ラテン部門を第一内科、ドイツ部門を第二内科と呼ぶようになった。だから佐藤進、池田謙斉らが聴講した一八七三年以後は、フレーリヒスとトラウベが二つの内科を主宰していたはずである。

一八世紀まで外科は、眼科、婦人科、性病科を包括していた。一七七〇年ヘンケル（一七七〇～七九）のとき産科を分離した。しかしルスト（一八二一～四〇）も、後任のユングケン（一八四〇～六八）も外科と眼科を兼ね、とくに後者は

眼科の手術で名声を博していた。一八五八年に性病科が独立科となり、六七年に眼科が独立したあと、六八年から外科はフォン・バルデレーベン（一八六八～七五）が主宰している。

シャリテの眼科でフォン・グレーフェ（一八六八～七〇）が主任教授を務めたのはわずか二年間だったが、最初の専門学会の創立や、一〇年後の『眼科学アルヒーフ』の創刊は彼の功績だという。その後任がシュワイガー（一八七一～一九〇〇）で、留学生はこの人に眼科の指導を受けている。外科と眼科の密接な関係を思えば、スクリバの下で外科を学んでいた河本重次郎が、眼科の留学生としてベルリンに来て、眼科の初代教授になったのも奇とするに足りない。ちなみに河本はベルリン大学の聴講申し込みにはカワモト・シゲジロウと書いている。片山国嘉も日本の人名辞書ではクニカであるが、ベルリンではクニヨシと届けている。

産婦人科ではマルチン（一八五八～七四）の後継者のシュレーダー（一八七五～八七）の大学婦人科のほかに、シャリテの産科・婦人科部門を統合したグッセロフ（一八七八～一九〇四）の第二婦人科ができ、二つの科は学問の面でも激しく競り合った。

ともかくシャリテの各部門は、自然発生的に拡大・分化してきたので、整然たる体制になっていないのは止むを得ない。

（フンボルト大学医史学研究所所長）

(Bereich Medizin (Charité) der Humboldt-Universität zu Berlin, Institut für Geschichte der Medizin)